あなたの生活に文学を

川上未映子　肌感覚に根ざす表現

吉本ばなな　自身の「必殺技」磨く

阿部　公彦

小説は何を書いてもいいジャンルです。恋愛や冒険はもちろん、不倫、殺人、放浪などさまざまな題材がとりあげられます。しかし、そんな中でとくに目立つのは「成長」というテーマかもしれません。

◇「変化」に焦点

小説は人間を対象とし、かつ、その「変化」に焦点をしぼる。そのため、年齢にかかわらず、人の「成長」はプロットの柱となりやすい。川上未映子さんの「夏物語（前編）」（「文学界」3月号）もそんな作品です。

前編だけで原稿用紙500枚という大作。第1部では主人公夏目夏子の作家修業時代が、貧しかった幼年時代の思い出とからめて描かれます。姉の巻子はホステスをしながら、娘の緑子を育てている。しかし、娘は母親と口をきかなくなり、やりとりは筆談だけ。そんな歪（ゆが）んだ親子関係に潜むものが、巻子の豊胸手術の企画をきっかけにべろっと皮をむくように露出します。親子が生卵まみれでぶつかり合うヤマ場は壮絶です。

ただ、詩人でもある著者の魅力は、何といっても皮膚感覚に根ざした、小気味のいい言葉。「貧乏の度合いについて知りたいときは、窓の数に限る」「いや、という字には厭と嫌があって、厭のほうがほんまにいやな感じがあるので、厭を練習」「飲み屋街ぜんたいがこう、茶色に変色しながらかたむいているような雑多な密集地帯」

いずれの一節も、ぬるぬるしてとらえどころのない世界をぎゅっと素手でつかまえてみせます。貧困や貧乳のことがしきりに書かれるのも、豊かさや贅沢（ぜいたく）さの欠如が、余計なクッションなしの直接的な表現につながるからでしょう。

絵・片山高志

しかし、成長を描く小説はしばしば、展開の中で文章の力点が変化します。「夏物語」も、はじめは自他未分化のまま世界の感触に浸していた語りが、次第に主人公の自我に光をあてるようになる。第1部で、巻子や緑子の姿を通して成長の現実を見ていた夏子は、第2部では自身の性や出産を強く意識します。さて、後編はどうなるでしょう。

◇成長への意志

「ユリイカ」（2月号）は吉本ばなな特集。岩川ありささんによるインタビューでは、吉本さんの禁欲的な創作態度が明らかになります。

短編小説は自身の「必殺技」だとする吉本さん。「短篇って書こうと思えば本当に上手く書けてしまうから、最近だともはや名人芸のような作品を書いてしまうこともあって、それはそれでやっぱりつまらないんですね。『名人芸ならできますよ』というのはだめな気がする」という。

背後にあるのは、吉本さんの「成長」への意志です。「だから別の仕事、たとえば長篇や新聞連載やコラボレーション企画などをやって壊しながら、家に戻るようなかたちで短篇を書いていきたいんです。そうしないと成長が止まってしまうので」

そんな吉本さんの「ミトンとふびん」（「新潮」3月号）は、ホームグラウンドの短編。「命取りになりかねない要素満タンのカップルでも、ちゃんと不幸に備えている心がまえだから、私たちはまだいっしょにいられる」という2人を描きます。

◇縛られない心

「キッチン」以来、ばななワールドでは、「体」から飛び出してさまよう「心」のありさまが描かれてきました。それだけに、プロットや場所、時間といった小説の「体」の部分にはやや無頓着にも見える。

しかし、人間にとってほんとうに巨大なものをとらえるには、しっかりした骨格のある事実や観念よりも、弱く幼い流動的な語りの方が有効なことがある。吉本さんが注意深く選択する「私たちはまだいっしょにいられる」といったふんわりした言い回しは、上手に「永遠の成長途上」を演出し、「体」に縛られない自由でやわらかい「心」を呼び覚ます。

宮下遼さんの「青痣（あおあざ）」（「群像」3月号）も成長をからめた作品。二の腕の疼痛（とうつう）をきっかけに、主人公トウコは母親に折檻（せっかん）された少女期のトラウマを想起します。ところが、遡（さかのぼ）った先の物語は、魔性を感じさせる猫に引っ張られるようにしての、あれよあれよの展開。水商売の母親の出奔、母の愛するたばこジターヌ、と設定や小道具にセピア色のレトロ感があり、全体が小劇場の芝居のような忙しい活劇性に満ちてもいます。宮下さんはオルハン・パムクの翻訳も手がけたトルコ文学者ですが、小説の文体には独自の推進力を感じました。

（英米文学者）

（月1回掲載します）